

『法華玄義』における感応道交（二）

— 眷屬妙について —

株 橋 隆 真

中国の南北朝時代に於ては、仏教による救済を次第に「感応」という形で捉え、種々の議論を為したが、特に隋の天台智顛（五三八〜五九七）に至って、「感応道交」という概念を打ち出した¹。

因みに「感応道交」とは、衆生の「感」と仏の「応」、即ち衆生の機感と仏の応同が互いに働きかけ、巧みに交通し合うことをいい、このように天台智顛は、必ず修道によって成仏してゆく衆生の働きかけと、同時にそれに対して仏が導こうとする化他の実践との双方が完備していなければならず、どちらか一方の働きかけだけでは、仏と衆生との間には救済は完成しないと考えていたのである。

従って、天台智顛の感応論を考察する場合、「感」と「応」という衆生と仏との両側面からの検討が必要不可欠になると言える。

そこで本論では、以上のような天台智顛の感応の論理に基づき、「感」の側面、即ち化益を受ける所化たる衆生の側の「眷屬」という考え方について、『法華玄義』（以下『玄義』と略称）の所説に沿って少しく検討し、仏の眷屬をどのように規定しているのかを考察してゆきたい。

(一)

さて、「眷属」とは、一般にはサンスクリット語 *Pañcāra* の訳で、「眷」とは親愛、「属」とは隷属で、歴史上の釈尊と深い関わりのある人々、例えば仏弟子や仏の親族をいうとされる。

『大智度論』ではこれを、

如_レ釈迦文仏未_レ出家_二時、車匿給使_上優陀耶戲笑、瞿毘耶耶輪陀等諸嫁女為_二内眷属_一。出家六年苦行時五人給待、得道時弥喜羅陀須那利多羅阿難密跡力士等是名_二内眷属_一。大眷属者、舍利弗目犍連摩訶迦葉須菩提迦旃延富樓那阿泥盧豆等諸聖人、及弥勒文殊師利跋陀婆羅諸阿毘跋致一生補処菩薩等、是名_二大眷属_一。

等と、内眷属・大眷属に分類して、前者には、出家以前の車匿等、又、苦行の時の五人の給待、或は、得道の時の阿難等が属し、後者には、舍利弗・目連等の諸聖人、そして弥勒・文殊等の一生補処の諸菩薩が属するとしている。

又、善導は、

一者在家眷属、二者出家眷属。言在家者仏之伯叔有其四人。仏者即是白淨王兒、金毘者白飯王兒、提婆者斛飯王兒、釈魔男者是甘露飯王兒、此名_二在家外眷属也_一。言出家眷属者、与_レ仏作_二弟子_一故名_二内眷属也_一。

と、仏には在家の眷属と、出家の眷属の二種があり、前者は仏の伯叔に四人あるのを在家の外眷属と名づけ、後者は仏弟子を指し、これを出家の内眷属と名づくとしている。

以上の二説は、いずれも仏(釈迦仏)と何がしか直接関係のある人々を指して眷属と呼んでいるようであるが、天台智顛の場合はどうかというと、『玄義』の眷属妙段の来意を述べる中で、

天性親愛故名眷、更相臣順故名屬。

と、一般的な解釈とはほゞ同様の見解を示しながら、

若無レ説而已。説必被レ縁。縁即受道人也。已受レ道故即成眷屬。

と述べ、広く教えを聞き、道を受ける人を仏の眷屬と考え、より普遍的に眷屬を捉えていたのであって、必ずしも仏との直接の交渉があるか否かにはこだわっていないようである。しかも天台智頭のいう天性とは、

譬如父母遺體攬レ此成レ身得レ為天性。

というように、仏の親族や直接の弟子でなくとも、その教えに触れ、道を受ける者は、恰かも父母の体を攬りあつめて我が身ができたように、天性として仏と親子のような深い関わりをもつことになるということを示している。

このことについては、次のように戒・定・慧についても述べられ、

行者亦尔。受戒之時、説此戒法授於前人、前人聽聞即得發戒。師弟所由生也。……戒

禪亦如是。授安心法如教修行、即得發定。是為我師我是弟子。……定

慧亦如是。説諸法門轉入人心由法成親。親故則信、信故即順。是名眷屬也。……慧

と、戒・定・慧の三学に於て、師弟の關係からも、仏の眷屬となり得ることを説明し、仏の教えに縁を結び、その後

に信順する眷屬の側面について明かしている。

そしてまた天台智頭は、眷屬を五種に分けて論じ、その中第一の理性眷屬の章に於て、

理性眷屬者、衆生如仏如一如無二如。理性相関、任運是子。

故云我亦如是。衆聖中尊世間父。一切衆生皆是吾子。

『法華玄義』における感応道交(二)

と、『法華経』譬喩品の文によって、仏と衆生の理性の一如なること、即ち、本来的に仏と衆生の間に父子關係が成り立つことを証明している。しかし、次の文では、

此是理性。不_レ関_二結縁不結縁_一、皆是仏子也。¹¹⁾

と、これまでとはいささか違った表現がなされている。つまり、前文までは仏との結縁を機に、信順する眷屬について述べられてきたのに対して、ここからは結縁の有無に関わらず、父子相関のような眷屬が成立する可能性について述べている。

これについては、次の業生眷屬でさらに推し進んで説かれている。例えば、

但衆生理論皆子、而飲_二他毒菓_一、有_二失心者不失心者_一。不失心者拜跪問訊、求_二索救護_一、与_二菓即服_一。故於_二大通覆講_一說_二妙法華_一、得_レ結_二大乘父子_一。其失心者、雖_二与_二良菓_一而不_二肯服_一、流_二浪生死_一逃_二逝他国_一。即起_二方便_一、或作_二三藏結縁_一、說_二生滅之法_一、或作_二通教結縁_一、說_二無生之法_一、或作_二別教結縁_一、說_二不生生恒沙仏法_一、或作_二円教結縁_一、說_二不生不生一実相法_一。若信若誘因_レ倒因起。如_二喜根雖_レ謗後要得_レ度_一。

等と述べ、理性として生仏不二とはいっても、実際には、各々の機根によって、仏縁を持ちながらも、信順する者もあれば誹誘する者もあり、或いは無関心な者もある。こうした様々な機縁に対し、方便を用いて感通別円の四教といった差別のある化導を行ない、それによって得度・未得度、又は善惡の別なく仏所に受生した者たちすべてを、眷屬であるとしているのである。また、第三の願生眷屬や、第四の神通生眷屬のように、業縁によらず宿世の結縁を得た者が、今また再び自らの願力によって仏所に受生することや、先世の仏との値遇により発心して自ら神通力を得、それによって分段生死の身ながら我が分身を仏所に受生させるといったことも、眷屬であると認めている。

ところで、天台智顛は別教や円教との結縁によって、無明を破して法身を証した菩薩が、所居の実報土から来生して、分段身として出現した釈迦仏の下に眷属となるのを応生の眷属といって、五種の分類の最後の第五番目に挙げているが、法身の菩薩が何故わざわざ今世に応身受生するのか、その理由を次のように述べている。

問法身惑除理顯、何故受_レ生。答_レ応身受生其意有_レ三。一為_レ熟_レ他、二為_レ自熟、三為_レ本縁_也。

と、つまりそれには一、熟他・二、自熟・三、本縁という三つの理由があるといい、第一の熟他とは他を利益し、調熟するために応生することで、前の業生の衆生は善根が微弱なため自ら発心することが不可能であるから、そこで諸々の利根の菩薩はすでに得道して法身を得たが、彼の衆生の迷闇を憐れんで慈悲の力を以て応生し、二十五有に入りて師となり、彼等を導いて仏所に向かわしめるというのである。例えば、『雜宝藏經』に、摩耶は過去世に鹿女夫人であつた時、千葉の蓮華を生み、その中に千人の小児がいて、賢劫に千仏となつたという故事や、『法華經』授学無学人記品において羅睺羅が授記される時、仏から、

常為_レ諸仏_二而作_レ長子_一、猶如_レ今也_也。

と説かれたことなどに因んで、

摩耶是千仏之母、淨飯是千仏之父、羅睺羅千之子_也。

であるとして、彼らはみな業生眷属というより、法身菩薩の応身として釈迦仏の父母妻子となるために受生したと見ている。何故なら、単なる凡夫が仏の父母等の眷属になることなど、決してあるはずがないと考えていたからである。

故に、

諸親族等、皆は大權法身上地。豈有凡夫能懷那羅延菩薩耶。

と云つて、仏の親族等の眷屬になり得るのは、法身菩薩のような勝れた機根のみ可能なことであると述べている。

それでは、声聞弟子などはどのようなことになるのかといへば、

諸声聞等悉内秘外現、示乘有三毒一実自淨仏土。

と、舍利弗や富樓那等の声聞弟子たちは過去世に大乘經を聞くという結縁があつたという經説や、富樓那たちのように菩薩行を内に秘めて外に声聞を現しながら、実に自ら仏土を淨め、衆生に三毒ありと示して方便を現し衆生を濟度するという經説などから、これらも應生の眷屬であるといふのである。

また、外道の怨惡、誹謗などについても法身の所爲であるといひ、

調達は寶伽羅菩薩、先世大善知識。阿闍世是不動菩薩、薩遮尼犍是方便菩薩。波旬是住不思議解脫。

と、たとえば提婆が釈尊の大怨敵となつたようなことにしても、本來衆生に対して善法を説く釈尊に實際には怨敵などあらわれることなどあり得ず、若し仮りにそうであるとしたら、釈迦仏には一切智や神通力があるにも拘らず、怨敵を滅尽することができなかったという過があることになるが、提婆が仏に対して逆害を行じたのは、他の衆生に対してこのような逆害を犯すべからざることを教えた、言わば善知識であつて、その前身である寶伽羅菩薩が應生して敢えて大怨敵の相を示したにすぎないのだとしている。

従つて同様に、阿闍世や薩遮尼犍もそれぞれ不動菩薩や方便菩薩の應生であり、『維摩經』等に説かれるような如何なる魔波旬も菩薩の方便であつて、それらは皆熟他の所作であるといふのである。

よつて、天台智顛は、

如_レ是等若親中怨好惡逆順、皆是法身。先是法内眷屬、今作_二応生眷屬_一。

と、このような親愛・中立・怨敵・好惡・逆順のいずれも先世には内眷屬であったものたちが、今は他を熟さんがために応生の眷屬となつてゐることを明かしてゐるのである。そしてこれらの応生眷屬による熟他という考え方は、諸余の經典からは導き出すことはできず、『法華經』の開權顯實、或は開迹顯本を説く經説によつて始めて明らかになることを、

故經云、未_レ會回_レ人說_二如_レ此事_一。今經仏自開_二近權顯_一遠實、開_二諸眷屬迹權顯_一本實。故文云、今當_二為_レ汝說_二最實事_一。是名_二応生眷屬_一熟他故來也。

と、『法華經』信解品や、菓草喻品の文を經証として述べてゐる。

次に第二の自熟とは、法身の菩薩が仏道を邁進することには限りがなく、生身仏、或は法身仏に従つて、自熟自成するために応生する眷屬をいい、例えば地涌の菩薩が、

我等亦自欲_レ得_二是真淨大法_一、受持誦誦解書寫、而供_二養_一之_上。

と、生身の釈迦仏の下に参集したことを指している。

また、第三の本縁とは、本師たる世尊に本来の宿縁があり、元々この仏に従つて初めて道心を発し、今また応生してこの仏によつて不退地に住し法身菩薩となることをいい、このような勝れた縁に牽かれて分段生死の身を以つて、仏事を施される釈迦仏の処に応生して眷屬となることを指すのである。これを天台智顛は、

猶如_二百川心_一須朝_二海_一。緣牽_二心_一生亦復_二如_レ是_一。

と、まるで百もの河川がひとつの海に集まってくるようなものだと喩えてゐる。

以上のように、天台智顛は眷屬を五項目に分類して論述しているが、その論点を整理してみると、まず、理性眷屬

では、仏と衆生は本来一如であって、結縁・不結縁に拘らず衆生は皆仏子であり、眷属であるとし、仏と衆生が父子相関していることを明かしている。

そして、業生眷属では、本来的に仏子であるとされる衆生の現実の様相は一樣ではなく、そのような差異が生ずるのは、衆生の機根が千差万別であるからで、仏の教えに直ちに適応するものもあれば、適応できないものもあり、そこで方便としての蔵等の四教を用いる必要性を示し、得度・未得度または善悪に拘らず眷属であるとしている。

さらに、願生眷属や神通生眷属では、自らの堅固な意志や、すでに得た能力によって眷属となり得る場合を明かし、そして最後の応生眷属では、あらゆる親・中・怨・好悪・逆順といった衆生の眞実の相は、実は法身菩薩であって、熟他・自熟・本縁という三つの目的や、理由によって受生した仏の眷属であることを論じている。

これらによって、経説や論書、或いは本生譚、伝説、説話等に現れたさまざまな衆生と釈迦仏との関係を、理性・業生・願生・神通生・応生の五種の眷属という範疇で捉え、説明しようとしたのである。

とりわけその中でも、特に仏に対して悪逆を働く者たちに最も着目し注意を払いながら分析して、その眞実の相を見い出そうとした点は、上述の智度論や善導等の分類とは明確な径庭があると言えよう。

(三)

さて、これら現前に仏に対して逆害を行じている者や、反仏道的な者までを、仏の眷属として取り入れる背景には、一体如何なる理由があったのか。その点について考えてみると、

此経説諸衆生悉是吾子、非客作人。論其理性無非是子、是名理性眷属妙⁽²⁸⁾。

といい、一切の衆生は皆悉く仏子であることを強調し、先天的に仏と父子相関していることを根底にして、

一切有心皆當作仏。闡提不斷心猶有反復。作仏何難。二乘灰滅、滅智則心尽、灰身則色尽。色心俱敗、其於五欲無所復堪。而能世世遇之尽教仏道。此則中間成熟妙。今於法華普得作仏、此希有事。

と述べるが如く、今この法華經によって一闡提もその性質を翻して仏縁を得て作仏し、或いは色心ともに滅尽した二乗さえも、世世に調熟されて普く作仏することなどを、重要な根拠としているように思われる。

そしてこのような法華円教の最も特徴的な力用を、

最上医王變毒為藥。能治敗種無心成仏、此則内外眷屬。

とか、また、

法華能治、是如実之説。能治難治此処則妙。

などと表現して、断善根の者も無心の者も、すべてを成仏させてしまうのは、あたかも最高の名医が毒薬を良薬に変え、難病を悉く治療してしまうようなもので、それは法華が真実の説であり、妙であるからだというのである。

さらに天台智顛は、これらのことが可能になる根拠として、

若法華不悟仏性、涅槃不応遙指。若衆生本無仏性、往昔結縁不教以仏道。原始要終仏性義明。

といって、一切の衆生には本々仏性があり、もしこの仏性がなければ、過去に結縁して教化するのに仏道を用いる必要はなく、最終的に成仏を得るのはやはり仏性があるからだと述べ、仏性の存在をその理由に挙げている。しかも、この仏性が確定するのはすでに法華經の經説によって明らかであるとして、

今法華定天性審父子、非復客作。故常不輕深得此意、知一切衆生正因不滅、不敢輕慢。於諸過去仏現在若滅後、若有聞一句、皆得成仏道、即了因不滅。低頭拱手皆成仏道、即縁因不滅也。

と、信解品や不輕品、或いはまた法師品や方便品の經説をもとに、正因・了因・縁因の三仏性が衆生において不滅であるというのである。

また、一切の衆生が仏性を有し、仏子となり得るのは、

於法華二発二大乘解一、自称昔日非真仏子。今説二一実之道一。從聞悟解法身得レ生。從仏口二生一、是聞慧中法身生、從法化生是思慧中法身生。得レ仏法分是修慧中法身生。三慧成就二是真仏子三。

と、譬喩品の領解段を引用し、聞・思・修の三慧が成就したまさにその時が、天性たる仏性が確定するのであると説明している。

しかし、これはあくまでも説法というひとつの結縁が基点とならなければならないのであるから、それを十六王子の覆講法華という点に見出し、例えば、

二万仏時教無上道一、十六王子覆講法華二。從是已來恒為眷屬一、世世与師俱生三。

とか、或いはまた、

往昔覆講結縁繫珠、二万億仏教無上道一。

と述べ、重要なポイントとして挙げているのである。では、何故覆講法華に着目したのかというと、その理由は、いわゆる種・熟・脱の三種益物との関連にあると思われる。つまり、

此經明レ仏設レ教元始、巧為衆生作頓漸不定顯密種子。中間以頓漸五味一、調伏長養而成熟之二。又以頓漸五味一而度レ脱之二。

と述べられるが如く、大通仏の結縁以後、今世の釈迦仏の法華の会座に至るまでの化導の過程を、種・熟・脱の三世益物として展開させていることが法華經の大きな特色であるとして注目し、それを原則としてすべての眷屬を把握し

ようとしていたと考えられるからである。

従って、こういった眷属の捉え方の根底には、性悪思想や十界互具があることは無論であるが、いま一つには衆生の化益の道程を法華經の經說によって明らかにしようとした、三益論との密接な關係が存在するといえるのではないだろうか。

(四)

以上、『玄義』の所説に基づいて、智頭の眷属に対する見解を見てきたが、智頭の前後の他説ともっとも相違する点は、上述のように、法華經の父子相關の説をベースにして、種々の衆生を理性の眷属として捉え分類し、就中仏に對して逆害を行ずるものや反仏道的なものたちまでを積極的に仏の眷属として取り入れようとしていることであり、それを可能ならしめるのは法華經に他ならず、これこそ「妙」たるゆえんであると力説していることである。

このように天台智頭にとって、現前の様々な衆生の眞実相を明かし、仏の眷属たり得ることを証していくことが、実はそのままありとあらゆる衆生が、仏教による救済の対象になり得ることを解明することに結びつくのであって、であるからこそ、ここに眞の宗教的価値が存在すると考えていたのではないだろうか。

今後更に検討を加え、能化の神通・説法、或いは所化の被る功德や利益についても考察し、より感應道交の本質を探りたいと思う次第である。

『法華玄義』における感応道交(一)

(註)

- (1) 拙稿『法華玄義』における感応道交について」註3参照(『興隆学林紀要』六号 平四)
- (2) 『大智度論』卷三三(大正二五・三〇三b)
- (3) 『觀無量壽仏経疏』卷二(大正三七・二五七c)
- (4) 『玄義』卷六下(大正三三・七五五b)
- (5) 同右 " (" " ")
- (6) 同右 " (" " ")
- (7) 同右 " (" " ")
- (8) 同右 " (" " " c)
- (9) 同右 " (" " ")
- (10) 『妙法蓮華経』卷二「譬喩品」に、「我亦如是、衆聖中尊、世間之父。一切衆生、皆是吾子。」とある。(『縮
刷妙法蓮華経』以下『縮妙』と略称・一三三)
- (11) 『玄義』卷六下(大正三三・七五五c)
- (12) 同右 " (" " ")
- (13) 同右 " (" " " 七五六b)
- (14) 『雜宝藏経』卷一に、「爾時鹿女、日月満足、便生千葉蓮華。開而看之、見千葉蓮華。一葉有一小兒。取之養育、以漸長大、各皆有大力士之力。欲知彼時千子者、賢劫千仏是也。」とある。(大正四・四五)

二c(四五三a参照)

- (15) 『妙法蓮華經』卷四「授学無学人記品」(『縮妙』・二四二)
- (16) 『玄義』卷六下(大正三三・七五六b)
- (17) 同右 " " " " " " " "
- (18) 同右 " " " " " " " "
- (19) 『妙法蓮華經』卷二「譬喻品」に、「為諸声聞、說是大乘經、名妙法蓮華教菩薩法仏所護念。」とある。
(『縮妙』・一〇八)
- (20) 同右 卷四「五百弟子受記品」に、「内秘菩薩行、外現是声聞、少欲厭生死、実自浄仏土。示衆有三毒、又現邪見相。我弟子如是、方便度衆生。」とある。(『縮妙』・二二九)
- (21) 『玄義』卷六下(大正三三・七五六b)
- (22) 同右 " " " " " " " "
- (23) 同右 " " " " " " " c)
- (24) 『妙法蓮華經』卷二「信解品」(『縮妙』・一四七)
- (25) 同右 卷三「菴草論品」(同右・一七六)
- (26) 同右 卷七「如来神力品」(同右・三九三)
- (27) 『玄義』卷六下(大正三三・七五六c)
- (28) 同右 " " " " " " " 七五七a)
- (29) 同右 " " " " " " ")

『法華玄義』における感応道交(二)

『法華玄義』における感応道交(二)

- (30) 『玄義』卷六下(大正三三・七五七a)
- (31) 同右 " (" " " ")
- (32) 同右 " (" " " ")
- (33) 天台智顛は、すでに法華經に於て仏性を悟っている理由として、「灰心二乗処入不入、於法華忽然得入。故涅槃遙指八千声聞得授記別。如秋收冬藏、更無所作^甲。」と、二乗作仏を挙げ、故に涅槃經に於て八千の声聞に対する授記も可能になるといふ。また、「今問華嚴師、頓極之教、說一切衆生有仏性不。若其有者二乗何不聞經授記作仏、那忽如響如唾。」といい、華嚴經に於ても二乗は作仏せず如響如唾であつたので、未だ仏性は説かれていないとしている。(いずれも『玄義』卷六下・大正三三・七五七a 参照)
- (34) 『玄義』卷六下(大正三三・七五七b)
- (35) 同右 " (" " " ")
- (36) 同右 " (" " " ")
- (37) 同右 " (" " " ")
- (38) 同右卷一上(" " " " ")